2009年12月6日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙8章26～39節

説教題：神による三重の励まし

はじめに

先週は中標津の教会に招かれ、修養会と礼拝のご奉仕にあずかることができました。メノナイトの宣教師の手によって54年前に始まった教会だと聞きました。礼拝人数は30人から40人くらいでしょうか。そんな教会が年に一度、外部から講師の先生を招いてみことばの学びをするということでした。講師の交通費や宿泊費、謝儀、そんなことを考えたら、その負担は決して小さなものではないはずです。みことばにしっかりと立とうとする信仰の姿勢に教えられれるものがあるように思わされました。

1　弱い私たち

（1）罪に定めて訴える者たち

ローマ人への手紙を書いたパウロが、新約聖書の中でも飛び抜けた信仰者のひとりであることは誰もが認めます。そのパウロが、自分ののうちに罪が住んでいて、心ではしたくないと思っているのに、何度も悪を繰り返してしまうと告白しました。心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えていると言いました。

普通の人がパウロのことばを聞いたなら、恐らくこんなことを言うでしょう。「パウロの言っていることは、泥棒の言い訳に聞こえる。 “自分では盗もうなんて全然思っていないのに、手が勝手に動いて盗んでしまうんです。悪いのはこの手なんです。” パウロは都合の悪いことは全部からだのせいにしているだけだ。」

この意見は、二つの点で間違っています。一つめは、パウロ自身のことですが、彼は自分の都合の悪いことをごまかしたり言い逃れするような人ではありません。かつてパウロはクリスチャンを縛り上げて迫害して歩いた経歴の持ち主です。普通ならば、隠してしまいたい過去ですが、パウロはこの事実を隠すさないのです。ある箇所でこう言っています。「私は使徒の中では最も小さな者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。」と正直に書いているのです。

パウロは言い逃れをしているだけだという意見が間違っている、二つめの理由。今度は私たち自身のことです。パウロは泥棒の言い訳をしていると主張しているあなたはどうなのか。あなた自身も同じ経験をしていなかったか。誰でも心では善をしたいと願っています。では、いつも願ったとおりの善ができるのでしょうか。むしろ自分がしてしまうのは、したくないと思っている悪のほうではないですか。

そんなふうに考えると、私たちは実のところ自分が思うほどには強くはないらしいことに気がつくと思います。

（2）弱さとうめき

そのことで、パウロは26節で「弱い私たち」と言っています。どんな弱さでしょうか。おそらくこの「弱い」というとらえ方は人によってかなりの差があるはずです。ある方は、「どうせこの世の中はどんなに頑張っても、

要領のいいやつがうまく生きていくだけで、自分なんか最初から勝てるわけがない。」そんなふうに投げやりに考えるかもしれません。

また一方では、「弱い自分」など認められないという方もいます。自分の辞書には「弱い」という文字はない。そんなふうに生きている方もいます。「弱い私たち」ということの本当の意味をおさえておく必要があります。

私たちは小さな時から親の期待、世間の期待に応えようと一生懸命がんばってきたと思います。しかし多くの場合、期待に応えることができず、つらい思いをします。私たちは苦い経験をどう処理してきたのでしょうか。

パウロが26節で「言いようもない深いうめき」と言っていることに注意したいと思います。言い換えれば「ことばにはならない、どう表現していいのかわからない、けれどもどこか深い深いところからひたひたと押し寄せてくるような、そんな悲しみや痛みの感覚」そんなうめきのことではないかと思います。そもそもどうしてうめいているのでしょう。できなかった、失敗したということがあまりにもつらかったので、どこか見えないところに押し込めてしまったからではないですか。押し込めたから問題が無くなったのではありません。つらい心はそのまま残っている。だからつらい心がうめき続けているのです。

どれほど自分が弱い者であるのか、そのことを知る鍵はここにあります。自分の中に聞こえてくるうめきです。ことばにはならないけれども、でも確かに悲しみの叫び声のようなそんなうめきの声がある。その声に耳を傾けていくとき、初めて私たちがどれほど弱い者であるのかに気がつくと思うのです。頭では自分は強い人間だと思っていたとしても、実は心でうめいている。それが私たちではないでしょうか。

そんな弱い私たちを神は三つのことで励ましてくださっています。

２　御霊の励まし

その一つめが聖霊の励ましです。

心の中のうめきに耳を傾けるなどと言いますと、なんと暗いことかと思われるはずです。でも、理由があるのです。26節。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊御自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」

複数の方からですが、どうしたらもっと神さまのことが身近に感じられるようになるのでしょうかと聞かれたことがあります。その方たちはこうも言いました。「神は高い山の上とか、雲の上、とにかく私から遠く離れたところにいるように思います。」この方たちは皆さん聖書を熱心に読み、信仰深くありたいと誠実に願っていました。それなのに、神さまのことが非常に遠くにしか感じられないと思って悩んでいました。恐らく皆さんの中にも同じようなことを感じている方がおられると思います。

では、神はどこにおられるのでしょう。26節を見ると、御霊は私たちが言葉にもできないくらいの深いところに降りていってくださり、そこで一緒にうめいていてくださる。そこで私たちのために父なる神にとりなしていてくださる。そうしますと神はどこにお

られることになるのか。山の上でも雲の上でもない。なんと私たちの深い深い闇のような所にすでにおられるのです。

私たちは神を捜しにあちこち旅に出かけます。あるいは神さまに会えるためにはこうしたらいいとかああしたらいいと一生懸命、いろいろな方法を試してみます。まさかその神が私たちの心の闇のような所で一緒にうめいているなんて想像もしなかった。

そうしますと、神を身近に感じられるにはどうしたらよいか。答えは非常に簡単です。自分の心の中から聞こえてくるうめきの声に耳を傾けなさい。神さまは私たちのうめきをともにされています。そのことをとおして私たちは神が一緒になられてうめいていくださっていることに気がつく。私たちの一番悲しいところで、一番痛みとするところで神さまが私たちに寄り添っていてくださる。そのような神の励ましに気がつくことになります。

３　キリストの励まし

神による二つめの励まし。それが34節です。「罪に定めようとするのは誰ですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。」

私たちはこんなプレッシャーをしばしば受けます。「あなたはどうしてミスばかりをするのか。あなたはどうしてもっとたくさんのことができないのか。あなたはどうして私のために、会社のためにもっとよいことをしてくれないのか。」

言われていることは確かにそのとおりです。ほとんど反論できません。反論できないということは、自分というのは他の人たちから見れば、出来損ないということになります。罪ということばは使わなくても、言っていることはあなたは失格者だ、あなたには罪がある。そういうメッセージを聞かされていることになります。当然苦しくなります。その結果、私たちは自分を責めてしまうわけです。「私はだめな人間だ。私は死んだ方が世のためだ。価値がない人間なんだ。」

こんなふうに私たちは、他の人たちから罪に定められています。そして自分自身の手で自分を罪に定めてしまいます。

ところが、そうではないと聖書は反論します。どんなに私たちがほかの人から「あなたは生きる価値がない。あなたはほかの人に迷惑をかけてばかりいる、くずのような人間だ。あなたは怠け者だ。」そんなふうに言われようとも、そのように言われている瞬間、キリストがあなたのためにとりなしてくださっていると言ってくださるのです。

「あなたはだめな人間だ」と言われて嬉しく思う人はいません。どこにも自分を弁護してくれる人がいない。そう思ったら、死にたくなります。しかし私たちには弁護してくださる方がおられるのです。死からよみがえられた方が、父なる神のそばにおられて、私たちのことを一生懸命とりなしてくださっている。言い換えれば、私たちが「あなたはだめな人だ」と言われた瞬間、神は私のそばにおられて、私たちが感じる悲しみをともにしてくださっている。そういうことになります。

否定的なことばを聞いて嬉しくなる人はいません。弱い自分を見て気落ちしない人はいません。でも私たちは、「あなたはだめな人間だ」と言われている瞬間でも、心から喜ぶことができる。なぜなら、たとえ全世界が

あなたの敵になったとしても、神は私たちの味方であり続けるというのです。

そのように聖書は励ましてくださいます。

4　父なる神の励まし

神の励ましの三つ目です。39 節。「高さも、深さも、そんなどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

考えてみると私たちは様々なことを恐れて暮らしています。できることなら苦しいことに会うことがないようにと願っています。迫害と聞いただけで恐ろしくなります。食べるものや着るものに事欠く生活なんて想像もしたくありません。

もし信仰のために迫害にあったならどうするだろうかと考えます。キリストを捨てるか、いのちを捨てるか、そのようなぎりぎりのことに追いつめられたら自分はどっちを取るだろうか。ときどき刃物で刺される自分を想像することがあるのですが、そういうのはいやだなと正直に思います。もし迫害にあったとき、自分は信仰を守り通せるだろうか。もしそこで信仰を捨ててしまうようなことになったらどうなるのかと恐ろしくも感じます。

しかし、聖書では何と約束しているでしょうか。「どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

もしかして私たちは将来、迫害に会い、信仰を取るかいのちを取るか、そんなぎりぎりの選択を迫られるかもしれません。ある方は最期までりっぱに信仰を守り通すかもしれません。しかし中には神を否定し、自分のいのちの方を選んでしまう、そういう方も出てくると思うのです。そういう場合、神はどうされるのでしょうか。神を裏切った者として厳しい罰が下るのでしょうか。

ペテロを見てください。ペテロはイエスが逮捕された後、こっそりとあとをつけ、裁判所の中庭に忍び込みました。自分はイエスの一番でした。一番弟子としてイエスのためにいのちを捨てようとそのときは思っていました。ところが、庭にいたほかの人から突然「あなたはあのイエスの仲間ではないか」と疑われたとき、急に自分のいのちが惜しくなって、イエスなど知らないと三度も否定してしまいました。

ペテロは神を裏切りました。信仰を捨ててしまいました。そのペテロはどうなったのか。厳しい罰を受けたのか。いいえ。よみがえられたイエス・キリストはペテロをもう一度召し出し、ペテロを励ましていくのです。

ペテロは誓いまで立ててイエスなど知らないと言い放ちました。そんな弱いペテロであっても、神は愛し続けて励ましていくのです。主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すものは何一つ存在しない。ペテロのことを見てもまさにそのとおりです。

神の愛というものがどれほど強いのかと驚いてしまいます。しかし、そうは言われても実感が湧かないのも事実です。人から否定的なことを言われて落ち込み、また自分の弱さを自分を責めてしまいます。神はどこにいるのかと神の助けがわかりません。その一方で、信仰を捨ててしまったらどんなことになるのだろうとおびえている私たちでもあります。

しかし神の愛は三重の守りの中で私たちをとらえてくださっています。自分は神をも

見捨ててしまう弱い者ですと気がつくとき、
そこに大きな恵みを備えてくださいます。